

小学校における金管楽器指導の考察と実践

The consideration of the brass instrument guidance and practice at the elementary school

新 村 元 植

Genshoku Shimmura

はじめに

最近、小学校においては、ほぼ全ての学校に管楽器のバンドが普及している。10年ほど前には盛んだったリード楽器主体の器楽合奏も吹奏楽や金管バンドに形態を変えている。管楽器中心のバンド編成は立奏にも座奏にも対応でき、比較的少人数でもアンサンブルが可能であり演奏場所も室内、室外を問わない点などその活動形態に柔軟性がある。とりわけ金管楽器は説得力のある音量、華やかな音色、金管楽器特有の色と形など小学生にとっては人気がある。しかしその指導には様々な問題がある。そこで管楽器の中で金管楽器指導における問題点とそのポイントを明らかにしたい。また提言も行い自身の活動指針の一つとしたい。

第1章 金管楽器の知識とバンド指導の問題点

金管楽器の材質

金管楽器とは金属の中でも真鍮（Brass）で作られた楽器をさす。真鍮は銅70～90%と亜鉛10～30%の合金で適度の堅さを持ち、楽器に伝播する振動を最も効率的に増幅する作用を持つ。また、銅と亜鉛の比率を変えることにより音色も変化する。一般に金属は柔らかく延伸性に優れ、ある程度軽いものが楽器の素材としては優れている。柔らかい金属の代表は「金」であるが、これは上腕で保持する楽器としては重量があり高価で楽器の素材金属としては適さない。また軽い金属の代表はアルミニウムであるが、これは軽すぎるので素材として適さない。これらの事を総合して、真鍮が素材として、最も優れている。また、過去においては様々な素材の金属で楽器が制作されたがいずれも長く使用されなかった。また、真鍮だけでは酸化しやすいので、表面にメッキを施し保護する。ただし管の内部にはメッキしない。金メッキははっきりした明るい音色になり銀メッキは柔らかい暗めの音色になる。ホルンは柔らかい音色を好む奏者の為に敢えてメッキを施さないことがある。

素 材	イエロー・ブラス ゴールド・ブラス レッド・ブラス スターリング・シルバー	銅70%, 亜鉛30% 銅85%, 亜鉛15% 銅90%, 亜鉛10% 銀92.5%, 亜鉛ほか7.5%	明るく輝きのある音色 柔らかく力強い音色 柔らかく深みのある音色 明るく繊細な音色
仕上げ	ラッカー 銀メッキ 金メッキ	音色の輪郭がはっきりしており、音の抜けも優れている ラッカーよりも音色に奥行きがあり、柔らかく明るい音色 輪郭がはっきりした柔らかい音色、銀メッキより暗い音色	

(楽器の材質と音色 <http://www.nagae-co.jp/trumpet.html>) より

金管楽器を使用した演奏形態の種類

(1) 金管バンド

以下の金管楽器と打楽器で構成された合奏形態を指す。金管バンドはイギリスで発達し、同属楽器だけの柔らかな響きに特徴がある。しかし、金管楽器は弦楽器や木管楽器のような旋律上の運動性に劣るため、速いパッセージや跳躍を含む旋律を金管バンド用に作・編曲された曲の演奏については大変技術を要する。よって、小学校レベルでは選曲について注意が必要である。

金管楽器 トランペット (B♭管) ・ コルネット (B♭管) ・ アルトホルン (E♭管)
トロンボーン (B♭管) ・ テューバ (B♭管)

打楽器 バスドラム・スネアドラム類・シンバル類・アクセサリー (トライアングル・カスタネット・タンバリン等)

(2) 吹奏楽

木管楽器 (フルート類・クラリネット類・サクソフォーン類)、金管楽器、打楽器で構成された合奏形態を指す。管楽器を中心に構成された、最も標準的な合奏形態である。運動性のある木管楽器とバンド全体の響きに厚みを与える金管楽器、音楽にアクセント与え、色彩豊かにする打楽器などオールマイティな形態である。ただ、その使用楽器についてオーケストラ曲のように定まったものが無く、作曲者は苦勞することがある。また、演奏者にとっても曲毎に使用楽器の増減がある。特に小学校のバンドによっては作曲者が指定する楽器がないこともある。このことが原因で作曲者が意図するアンサンブルが出来ない場合が生ずる。また小学校レベルでは、最近金管バンドに木管楽器を導入した吹奏楽の合奏形態が増加している。最近小学校レベル低音の厚みを増すため弦バスを使用する団体も多くなってきた。

(3) 器楽合奏

リード楽器 (アコーディオン・鍵盤ハーモニカ・オルガン等)、木管楽器、金管楽器、打楽器で構成された、合奏形態を指す。オーケストラの弦楽器をアコーディオンなどのリード楽器に置き換えた合奏形態を指す。リード楽器は難度の高いフレーズも管楽器に比すと演奏しやすいが、ヴィブラート等の音楽的ニュアンスに乏しい面がある。また、管楽器の組み合わせは、アンサンブルの音

色に差異があり、演奏については注意を要する。

(4) トランペット鼓隊

トランペットと打楽器で構成された演奏形態である。トランペットに他の楽器を追加すれば金管バンドや吹奏楽に衣替えできるのでバンド導入段階の初期に計画されることが多い。主旋律を演奏できる楽器がトランペットのみであるため、指導はしやすい面がある。しかし、旋律の幅が限られるため音に深みが無く、音楽的に内容が乏しい面がある。しかもその後吹奏楽に衣替えしようとする、トランペットの数が多すぎてしまい、バランスに欠けてしまう事がある。

(5) その他

その他に鼓笛隊（リコーダー・打楽器）、鼓隊（打楽器、鍵盤楽器*鍵盤楽器は打楽器に分類される）があるが、金管楽器について論じているのでここでは省く。

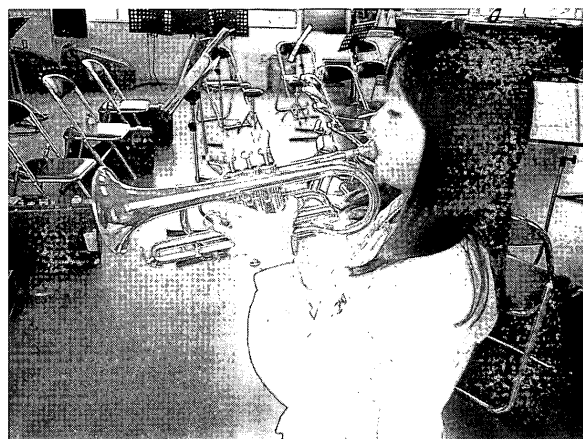
金管楽器指導とその問題点

(1) 楽器を保持する姿勢

小学校段階の金管楽器指導は注意深く行う必要がある。最近の小学生は体格が良くなったとはいえ、楽器は大人が使用するものと同じである。これはオーバーサイズの場合が多く、楽器を保持する姿勢に無理を生ずる。(写真1)



オーバーサイズのトランペット（写真1）



適当な保持姿勢のコルネット（写真2）

小学校3年次から合奏に参加する小学校が多いが、他の金管楽器においても同様の事態が生じている。ほとんどの金管楽器は左手で楽器を保持するが、手のサイズが小さい小学生には長く保持することは大変難しい。よって、だんだん楽器が重くなり、保持する姿勢が悪くなる。これは演奏にも悪影響を及ぼすことは必然である。元来金管楽器は、大人用に設計されている。しかも西洋で発達した楽器であるため、西洋人（主にアングロサクソン人種）のサイズに適合するように設計された。ゆえに我々東洋人にとってはもともとオーバーサイズなのである。これをさらに体格が小さい小学生が演奏するのであるから、演奏技術を習得する以前に問題点があるのは明らかである。体格

の小さい小学生にはトランペットよりコルネットが適している。コルネットはトランペットと同じ口径のマウスピースで演奏するが、音色はトランペットより柔らかく保持する姿勢もより自然である。(写真2)

チューバ等の大型の楽器は、比較的大きな体格の児童が担当するが、写真3の保持姿勢は楽器が練習者と離れているため前屈みになり、下顎部が前に出て窮屈な姿勢になっている。この姿勢では上半身に無駄な力が加わり、長く演奏することが困難である。この窮屈な姿勢が長く続くと、下顎部に無理が重なり口を開けることが困難になる顎関節症を引き起こす。金管楽器奏者がかかりやすい症状であるが、これに罹患すると木管楽器を含めた管楽器を演奏する限り、なかなか治療が困難である。

写真4は楽器を練習者に近づけ、適当な保持の姿勢に修正した。このことにより、長時間の練習にも耐えることが出来る。このように各楽器にわたり指導者はその姿勢についても注意を払う必要がある。



無理な保持姿勢 (写真3)



適当な保持姿勢 (写真4)

また金管楽器は後述するマウスピースを介して演奏する。これは直接唇に当てるもので、ある程度圧力をかけて唇に当てないと音が出ない。これは発達途上の小学生の前歯にとって、常にある一定方向の圧力が加わり歯列を乱すことがある。これらは指導者が常に適正な圧力で演奏することを児童に伝え、決して無理な音量や音域を要求することが無いように心がける必要がある。

無理のないバンド活動

バンド指導者にとって指導することによりそのバンドが進歩することを願うのは当然のことである。しかしその指導があまりに結果ばかりを追い求めることは小学校段階では疑問点が残る。将来において児童がどのような才能を開花させることができるかはまだ判断できない。結果を出すためには十分な練習時間が必要であるが、この事が他の必要な時間を削ることで生み出されるという事態は感心できない。「ゆとり」とは全く逆の指導である。

「無理をしない」指導はバンド指導の根幹に関わるほどの重要な問題である。小学校に指導に行き、こちらから挨拶すると明るくはきはきと大きな声で挨拶が帰ってくる。コンクール等ですばら

しい成績の小学校ほど挨拶は上手である。しかしこれも行き過ぎると心からの挨拶ではなくなると思う。バンドの小学校のコンクールや演奏会で素晴らしい演奏を披露した児童が上級学校ではバンド活動を辞めてしまう例がある。いわゆる「燃え尽き症候群」である。これもその児童にとって、あまりに無理な活動であったことが原因になっていることが多い。指導者にとっても自身の休日や勤務外時間を使用しての指導になる。これからのバンド指導は指導者や児童にとっても「無理をしない」しかも「効果的な」バンド指導がキーワードになる。

指導者の不足

小学校においては特別活動の一環としてバンド活動が存在する。当然授業の一環としての位置付けのはずであるが、実際は授業時間外の活動である。しかも、ほとんど毎日、活動している事が多い。学校の教育活動であるので、指導者は当然のごとく教員が担当する。教員は学校の公務や教科指導等で忙しいがその合間を縫ってバンドの指導を行わねばならない。また、休日などの指導もあり、それらの時間外超過勤務に対する確実な保証もないのが実情である。このような奉仕活動を前提として小学校のバンド活動がなりたっている。

大学や短大で管楽器を経験した積極的な指導者がその小学校に存在すれば良いが、「他に適任者がいないので」引き受けた管楽器指導の経験がない指導者にとっては、その負担は大変である。教員養成課程の大学では、管楽器や打楽器の奏法に関する科目は存在しても系統立てて教えてはいないのが現状である。また吹奏楽の知識を実践的に指導する科目がない教員養成大学が多い。教員養成大学では他に学ぶ教科が多く存在するがバンド活動に対応した科目設定も重要である。筆者が非常勤講師をしている鹿児島大学教育学部では管楽器の専攻生が音楽科生16～17名の中で毎年2～3名程度である。小学校におけるバンド指導の重要性に比べてその専門的な教育を受けた人材があまりにも少ないのが現状である。これは授業の中で管楽器を指導する必要がない現在の授業体制がネックになっている。

いきおい活動を見童に任せることが多くなり、楽器の指導などほど遠い実態になってしまう。特に小学校では音楽は音楽専科の教諭にバンド活動を任せる傾向があり、音楽専科の教諭がピアノや声楽専攻である場合はその指導の負担は大変である。一般的には、「音楽の先生だから、音楽というジャンルは何でも指導できるだろう。」という見方が一般的であろう。しかしこれは大きな間違いで、管楽器の経験がない指導者にとっては、これがために精神的な影響が出るほどの大きな負担であることを周囲は知らない。また、音楽専科以外の先生が指導する場合も多い。小学校のバンド活動は学校の管理下にある教育活動である場合が多い。このために外部の指導者を依頼することがむずかしい。仕事上でもバンド指導は時間外の超過勤務であるのが実態である。このような場合も指導者の好意と熱意に頼っているのが現状である。管楽器の専門教育を受けた教師は自分もそのような指導を受けているので、バンド指導はそれほど苦にならない。むしろ楽しみで指導している教師も多いはずである。しかし、その他の教師にとっては「校長から任命された」だけの「重荷」になっていないだろうか。

その小学校にバンド活動の指導者が見つからない場合もある。その際は地域のボランティアによ

り活動が支えられている場合もある。ほとんどの場合、他に仕事を持ちながらの指導であるので音楽的な面の指導が出来ていない。楽しんで活動する中にも音楽的向上を目指す姿勢が無いとバンド活動はその意義を失い、やがて消滅する。

外部指導者の活用

小学校の先生方の中には、担当しているバンドにもっと音楽的な表現を可能にしたいという希望を持つ指導者が存在する。「そこそこの演奏が出来るバンドであればよい。」という指導者以外はほとんどの指導者がこのような願望を持つはずである。毎日同じ顔ぶれで同じ指導者が指導することは、演奏技術の向上を目指すバンドにとってマンネリになりかねない。そこで、外部指導者を活用することで活動がうまく進行することがある。指導者の中には外部の指導者を依頼するだけで、全て演奏上の諸問題が解決するような錯覚を持つ指導者が存在するが、これは大きな間違いであろう。そのバンド毎に企画した活動計画をたて、「どのような問題が生じているか」を吟味し、その部分を解決すべく外部指導者を活用することが大切になる。心得た外部指導者はまず、指導する団体の問題点を浮き彫りにし、そこを重点的に指導する。何故なら、予算的にも物理的にも指導する時間が限られているからである。この点を指導される側も理解する必要がある。この点を十分理解しないままに外部の指導を受けると担当の指導者と外部の指導が食い違い、最終的に小学校の児童が混乱を来す事態になる。この点をしっかり理解しなければならない。

指導者不足を補う可能性

小学校における指導者不足については各小学校単位での解消は大変難しいことである。しかし、各小学校単位での指導者不足解消が難しいのであれば、範囲を広げて各地区ごとでの解消はできないのであろうか。ある地区に小学校が数校あれば、その小学校が連携し各小学校の教諭が自分の得意分野を指導する時間を作る。児童は希望する小学校教諭のもとで指導を受ける。これはバンド指導だけでなく、様々な分野での指導が考えられる。指導の時間は総合的学習の時間等を充てればよい。これには楽器の問題や各楽器の人数バランスなど問題も有るが、少なくとも指導に熱心で慣れた先生がバンド活動を指導することにより、効率的指導がしやすくなる。

バンドのレパートリー

小学校における各種のバンド（バンドという言葉で括ることに抵抗はあるが）のレパートリーについても問題がある。第1に演奏形態の種類が多く、一つの曲を作曲又は編曲する際にどの演奏形態の作曲又は編曲を行うかが問題になってくる。

たとえば、鼓笛隊には旋律群はリコーダー、木琴、鉄琴など非常に限られてくる。トランペット鼓隊は鼓隊編成に旋律楽器としてトランペットが加わるが、小学生の演奏に耐える音域で作曲するとなるとせいぜい口から上2点二程度である。この編成で音を3声にするということは作曲家にとって自由な発想を制限されることになる。特に作曲は曲のイメージを独自の楽器群に合わせて作曲するのであるが、事実この編成におけるオリジナル曲は大変少ないのが現状である。また、トラン

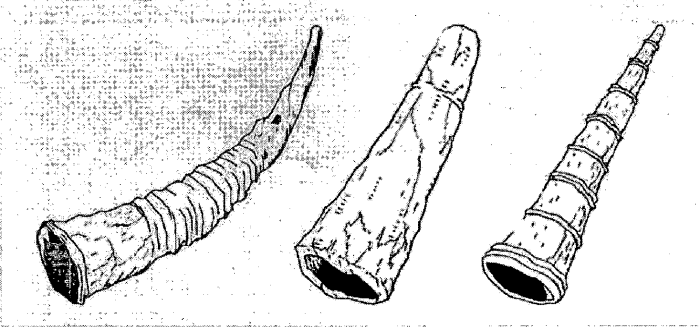
ペット鼓隊に他の金管楽器をプラスして金管バンドを編成することが出来る。さらにこの編成に木管楽器を増やして吹奏楽を編成することが出来る。この金管バンド編成ではある程度作曲者もイメージが出来るらしく、近年多数のオリジナル曲が増加してきた。しかしこの編成でも小学生にとっては、トランペットやコルネットが最高音楽器になるが、2点へが実用音域の最高音であろう。これ以上の高音域の使用は小学校段階においては演奏者に過度の負担を招くおそれがある。それでは多様な楽器編成が可能な吹奏楽編成ではどうかというと、楽器のオーバーサイズの問題に加えて演奏法の確立が出来ていない事とそれを指導できる教員の不足が問題になってくる。この吹奏楽編成では、オリジナル曲も多数存在する。しかし、それを演奏できるかどうかになると結論的に小学生には無理な音域の曲が多く存在している。特に木管楽器の指導は金管楽器に比べると難しいのが現状である。金管楽器は金属のマウスピースで発音するが、木管楽器は木製のリードを使用する。これは消耗品であり、品質の見分け方も一見ただけではわかりにくい。また、構造についても木管楽器は管体の穴をふさぐのに手の指が届かないので、それを補うため、複雑にキー（レバー）が入り組んでいる。このため、故障しやすく使用していると、調整が必要になってくる。しかし最高音のピッコロから最低音のテューバまで、同じ管楽器で統一でき、作曲者は自由な発想で作曲が可能であるので、曲のレパートリーも多彩である。

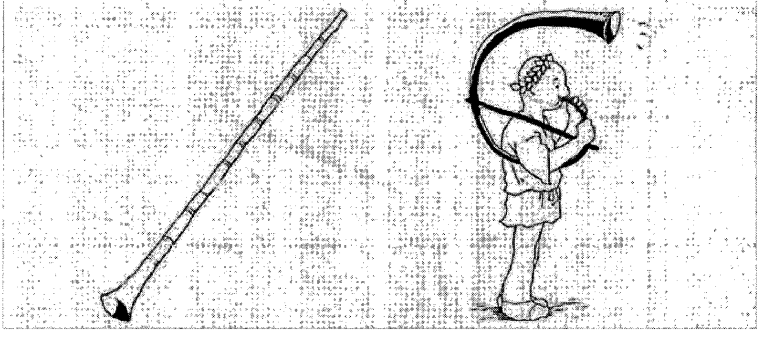
このように指導上の問題点を抱えているバンド指導のポイントとして、各楽器毎の指導がある。各楽器はその演奏法についてここに指導する必要がある。第2章ではまずトランペットを取り上げ、楽器の生い立ちから指導について述べる。また、トランペットを含む金管アンサンブルについても言及する。

第2章 トランペット

トランペットの指導法

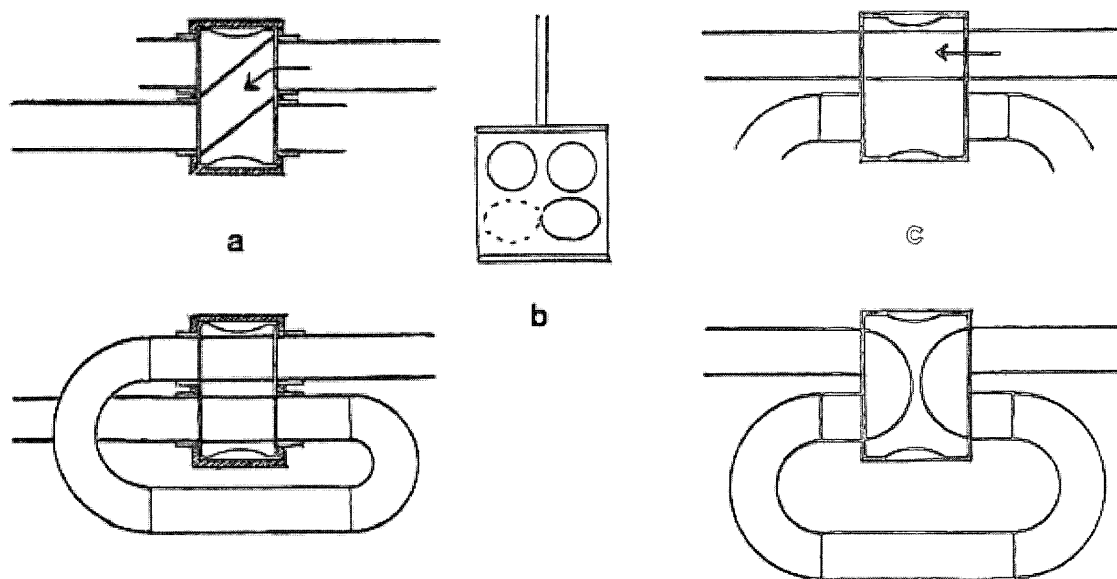
(1) トランペット (画像出典 IPA「教育用画像素材集サイト」<http://www2.edu.ipa.go.jp/gz/>)

楽器の変遷	
石器時代	<p>メガホン型ラッパ (全ての金管楽器の祖先)</p> 
紀元前 15世紀	<p>現在のトランペットに似た楽器、ツタンカーメン王の墳墓から出土 58cm (銀製) 49.4cm (一部青銅製)</p>

旧約聖書時代	<p>ヒヤショゼラー (Hasocera), ヨーベル (Jubel) イスラエルで使用された長さ20cm程度の直管ラッパ アッシリアの直管ラッパ</p>
北欧紀元前6~10世紀	<p>ルーレル (Lurer), ルール (Lur) 円錐形, S字管をした2本一組のラッパ, マウスピースを備える</p>
ギリシャ・ローマ時代	<p>サルピックス (Salpinx), ローマではトゥーバ (Tuba) やリトゥス (Lituus) トゥーバは直管の楽器, リトゥスは先端が少し上を向く直管の楽器, 長さ1Mを越える角と金属で出来たラッパ, マウスピースを備える。ブッチーナ (Buccina) または, ブキーナ (Bucina *古ラテン語) 円錐形, スーザフォン様の形態, マウスピースを持つ。</p> 
1240年頃	<p>トゥバエ (Tubae), トゥベクタ (Tubecta) トゥバエはトロンベッタ (トランペット) の俗称, イタリアのフレデリック2世がアレツォの町に送った楽器</p>
1400年代	<p>トロンバ (Tromba), クラリオン (Clarion) 現在のトランペットに似ているが, 肉厚で重く, ベルも小さい</p>
1511年	<p>フェルト・トランペット (Felt-Trumpet), クラレータ (Clareta) 1511年の木版画に見られる楽器, フェルト・トランペットは野外での戦争で使用された。クラレータはギルドにより使用され, 19世紀まで続いたバツハ・トランペットへ進化した。</p>
15世紀	<p>ナチュラルトランペットにおけるクルークシステム (継ぎ足し管) スライド・トランペットに進化する</p>
16世紀	<p>トロンバ・ダ・ティラルシ (Tromba da tirarsi) 現代イタリア語では Trombone a tiro (スライド・トロンボーン) と呼ばれ, 音程を最大3度下げることが出来る。</p>
17~18世紀	<p>クラリーノ (Clarino) 管の途中に3個の穴をあけたラッパ</p>
1760年	<p>クラッペン・トランペット ドイツのケールベルがトランペットに4個の穴をあけ, キーをつけたのを開発した。ハイドンのトランペット協奏曲は6個の穴の空いたものために作曲された。</p>
1788年	<p>イギリスの Charles Clagget は2本のトランペット (D管, E♭管) を合し, 瞬間的にマウスピースを変えることにより半音階を演奏することが出来るトランペットを考案。</p>
1815年	<p>シレジアのブリューメル (Blühmel) とベルリンのシュトルツェル (Stölzel) がヴァルヴシステムを開発。</p>
1832年	<p>ウィーンのヨゼフ・リードル (Josef Riedl) が箱形ヴァルヴを改良してロータリー・ヴァルヴを開発。</p>

トランペットの起源は古く、約紀元前15世紀から後のエジプト彫刻にその姿を見ることが出来る。構造的にはマウスピースから金属の管をとおり、ベルと呼ばれる開口部に至る、単純な構造である。このように簡単な構造で音量が有るために、合図や戦争などで使用され、西洋では様々なラッパが出現した。(楽器の変遷参照)

トランペットらしい形態になったのは、15世紀以降であるが、当時のトランペットは現在の約2倍の管長で、自然倍音だけしか演奏できない楽器であった。これをナチュラルトランペットという。特に高い音程では倍音の幅が狭くなり、唇の調節だけで音階が演奏した奏法をクラリーノ奏法という。しかし、このクラリーノ奏法は高い技術力が必要であったので、中部ヨーロッパではトランペットギルドと呼ばれる技術集団があり、門外不出の演奏技術として一部の者しか演奏できなかった。特に高音域を演奏するためツィンク(独語)と呼ばれる角状のトランペットもあった。これらの時代の演奏はJ・S・バッハの「ブランデンブルグ協奏曲」第2番の長大なトランペットソロに聞くことが出来る。この曲は他の楽器との協奏により演奏されるが、その最高音はソプラノB♭トランペットの最高音である上2点B♭の上方、上3点Fにもなる。このような高い音域のバロック曲を演奏するために、開発されたのが現代のピッコロトランペットである。その後、16世紀以前はクルークと呼ばれる長さの異なった管を調が変わるたびに付け替えていたが、16世紀になり管にキーを取り付けることにより音程を変えることが出来るようにした。この楽器をキー・トランペット(有鍵トランペットまたはクラッペントランペット)と呼ぶ。有名なJ・ハイドン(1732~1809年没)のトランペット協奏曲(1796年)はこのキー・トランペットの名手であったウィーンの宮廷トランペット奏者であるアントン・ヴェイジンガーの為に作曲されたものである。そして1815年StölzelとBlühmelにより革命的なヴァルブ機構が発明された。トランペットのヴァルブ機構とは音程を変えるためには管の長さを変える必要があり、それをヴァルブにより管の長さを調節できるようにした物である。(図1)



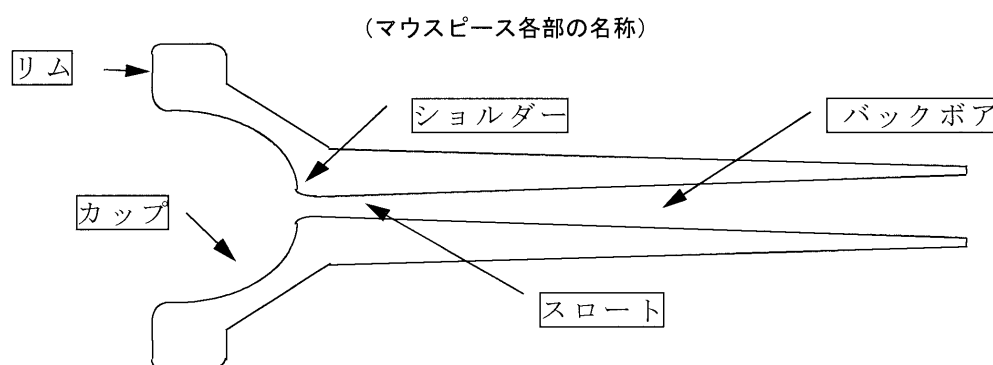
ブリューメルとシュトルツェルが考案したヴァルヴシステム(図1)

ヴァルブの機構にはドイツ語圏でトランペットに使用されているロータリー方式とイギリス、フランスで発達し現在世界中で使用されているピストン方式の2種類がある。音色はロータリートランペットが重厚で柔らかい、これは管がピストントランペットに比べて太い為である。ドイツ、オーストリアの作品はロータリー方式のトランペットがオーケストラにもよく合うため、現在でもドイツ系作曲家の演奏にはロータリー方式のトランペットが使用される。これに対してピストン方式のトランペットは現在普通に見られるトランペットで、保守が簡単であるため、世界中で使用されている。

(2) トランペットの発音1

金管楽器の構造はマウスピースを唇を当て、それが振動して管を伝わり音が出る。最後はベルと呼ばれる開口部で振動は増幅され音となる。従って、人間の声帯が音を出す構造と非常によく似ている。時に人間は風邪を引き、咳をしたりその他の原因で声帯を使用しすぎると声がかすれる。すなわち声帯が振動しにくくなる。金管楽器もこれと同じように振動体である唇が荒れたり、傷ついたりすると振動しにくくなり、音が出にくくなってしまう。また、金管楽器でさけて通れない問題がある。それはいわゆる「バテ」である。これは、唇は体の一部分であるので筋肉で支えられている。唇も口輪筋や大頬骨筋、頬筋、口角下制筋などの筋肉を緊張状態に置くことにより振動する。これら筋肉に乳酸が蓄積し、疲れてくると唇が振動しにくくなる、いわゆる「バテ」た状態になる。この状態に陥ると筋肉の疲れが回復するまで演奏不可能な状態になってしまう。特に金管楽器の最高音を受け持つトランペットやホルネットは最もマウスピースの直径が小さく、唇の筋肉が疲れやすい。これを解消するには、日頃の定期的な練習が必要である。また、自分の演奏状態を常に把握し、最高のコンディションに置く、注意深い努力も大切になる。

マウスピース各部の名称と働き	
リム	厚いリムは耐久性を向上させるが、柔軟性が無い 薄いリムはコントロールがしやすいが、耐久性が無い
カップ	直径が大きいカップは唇が振動しやすく、低音と音量が向上する。 反面、耐久性が無くなり、「バテ」が早い 直径が小さければ高音は出しやすくなるが、唇が振動しにくくなる。 低音は出しにくい。
スロート	細いスロートはコントロールがしやすいが、音の抜けが悪い。 太すぎると同じ音を吹くのに多くの息が必要
バックボア	広がりや緩やかなマウスピースは音質が硬めになる。 広がりや急だと音量が豊かになり、音程が高めになる。
ショルダー	U字型のショルダーは柔らかく、太い音質。タンギングが柔らかくなる。 V字型は明るく、鋭い音質。タンギングがはっきりする。



トランペットは唇の振動がマウスピースを通じて管体の空気に伝導して最後にベルと呼ばれる拡声部で音量が増幅され音が出る。初心者には置いては作音楽器であるトランペットの音を出すこと自体が難しいことのように思われるが、実は最もトランペット奏者を悩ますのはトランペットらしい音色をどのように作り出すかである。唇の振動がそのまま音になるという事実を演奏者はなかなか実感しない。それは楽器から出てくる音にのみ囚われ、その音質を良くしようと考えることに起因する。

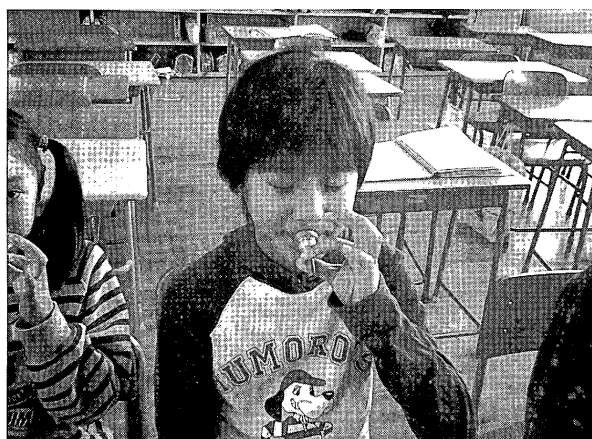
トランペットの音質を良くするためには、口唇部のみの発音 (buzzing) のチェックから始めるべきである。これは上唇を下唇にかぶせ、最初は音を出すことより、口笛のように息をセンターの細い穴から続けて出すことを考える。その次の段階として少しずつ唇が振動し、音が出ることを確認する。この時の音が蜂の羽音 (buzz) ににていることから口唇部のみの発音を buzzing と言う。この際に注意することは、上下の唇が均等に振動するのではなく主として上唇が振動して音が出ていることに注目すべきである。この事は buzzing 中に下唇を指で触り振動を止めても buzzing が中断しないことからわかる。さらにこの状態で口唇部が上下ともうまく均整がとれ、スムーズに振動することを確認した後、マウスピースでさらに振動することを確認する。この段階で十分な音量の振動と息漏れのない輝かしい音色を獲得することが重要である。このマウスピースのみの音色チェックを怠るとトランペットの音色に悪影響を及ぼす。また、金管楽器で最も苦手とすることはインターバル練習である。これはある音程から他の音程に移る練習のことであるが、この音程の幅が5度以上になると難しくなり、8度以上になると大変難しくなる。これを短時間に反復することは困難を伴うが、金管楽器奏者にとってはさけて通れない重要な練習になる。マウスピースのみの音色がすなわちその奏者の音色となることを理解すれば、この音色チェックがいかに重要なことかが理解できるようになるだろう。

(3) トランペットの発音2

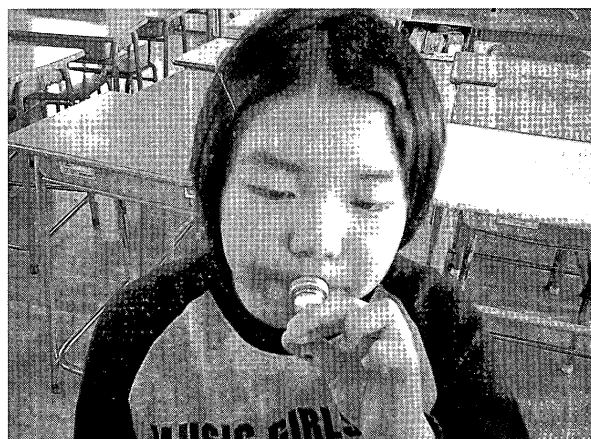
トランペットらしい音色とは、どのような音色だろうか。トランペットは直管系の楽器である。Pの音色は柔らかく演奏する事は容易である。しかし fの音色は直管系の楽器らしく、輝かしく遠くまで鳴り響く音色になる。この事は一見良いことのように思われるが実はそう簡単ではない。特に大規模な合奏では大変効果的であるが、小アンサンブルや独奏においては逆に周囲と音色的に解け合わず、大きな欠点ともなりうる。吹奏楽など大編成で演奏するスタイルで小編成アンサンブル

を演奏すると、時にバランスのとれない音楽性を無視した演奏になりがちである。この事を理解した上で音色の研究をすることが大切になる。

また、発音についても注意深く行い、乱暴な練習はさけるべきである。まず、ウォームアップとして buzzing を実施し、ある程度唇が振動するようになったら、マウスピースのみの練習をする。その際、過度なプレッシャーを唇に与えないためにマウスピースの中央部を人差し指と親指で支持し練習する。(写真5) その際に口唇部への圧力を必要以上に使用している練習者は中指を人差し指に添えることがあるが、口唇部への圧力を減らすことを目的にしているのもので極力さける。(写真6)



人差し指と親指で支持 (写真5)



中指を添えている (写真6)

この事により練習者は楽器が音を創り出しているのではなく、唇の振動が音を創り出していることを自覚することになる。そしてその際には実音Fを中心とした上下5度程度の Portamento を実施し、口唇部の柔軟性を高める事が必要である。この練習により、高音のアンブッシャー (embouchure) と低音のアンブッシャーが異なる、いわゆるダブルアンブッシャーを防ぐことが出来る。

発音については、マウスピースだけの場合は不安定で口唇部の振動状態がはっきりわかる。この部分だけで実音Fを中心にした上下の Portamento 時の発音が、艶やかな緊張感のある発音を心がける。ここでの発音がトランペットの音色に大きく影響するので、大変重要である。練習者はこの事をしっかり理解するべきである。逆に練習者の音色が不安定でトランペットらしくない場合は、buzzing とマウスピースだけの練習を行い、十分に振動した音色を体験すべきである。トランペットの音色は口唇部の振動だけではなく、口腔内、所謂キャヴィティ (cavity) が大きく関係する。舌後部を下げキャヴィティを確保することにより、口腔内を通る空気の流れはゆるやかになり、低音すなわち比較的低い振動数に対応できるようになる。舌後部を上げ、上顎に近づけることにより口腔内を通る空気の流れは速くなり、高い振動数に対応することが出来、高音を出しやすい。また、これと同時に唇のアパチュア (aperture) を広くすると振動部分が広がり、低音が出やすくなる。これと反対に唇のアパチュアを狭くすると息の流れが速くなり高音のアンブッシャーとなる。また低音は下唇の内側の柔らかい部分を使用し、高音は下唇の外側の比較的堅い部分を使用する。

このような詳細にわたる音色の研究を経て、アンサンブルや独奏にも耐えうる音色を創り出すこ

とが可能になってくる。

(4) トランペットを用いた練習

口唇部だけによる buzzing, マウスピースのみによる発音練習を経て、実際の楽器を使用した練習に移る。トランペットはソプラノトランペットより1オクターブ高いピッコロトランペット（F管・D管・B♭管）やソプラノトランペット（D管・E♭管・C管・B♭管）、ソプラノトランペットより1オクターブ低いバストランペット（B♭管）等がある。これらは作曲年代や曲想、アンサンブルの形態により使用する楽器が変化する。ピッコロトランペットは主にバロック期の曲を演奏する際に使用される。バロック期に使用されたトランペットは現在のようにヴァルブ機構が無く、自然倍音で演奏しなければならなかった。そのために自然倍音の幅が狭い高音域での演奏を余儀なくされたのである。しかもその演奏技術はギルド制により厳格に受け継がれ一般には普及しなかった。これにより一時期バロック期のトランペット音楽は歴史上に埋もれていたが、近年になり演奏技術の向上とピッコロトランペットの開発により、その輝かしい音楽が復活した経緯がある。

ソプラノトランペットの中で普通トランペットと呼ばれるのは、B♭管トランペットである。これはジャズからクラシックまでオールラウンドなトランペットとして世界中のトランペットプレイヤーがまず手に取る楽器である。C管トランペットはオーケストラで使用される楽器である。フランスではトランペットといえはC管を意味し、フランスの作曲家はC管のトランペット用に作曲することが多い。B♭管とC管の違いはまず、B♭管がC管より長2度長い（低い）。また音色はB♭管が柔らかく、深い。C管は明るく、軽い音色である。これにより、フランスの作品を演奏する際は、C管を使用し、ドイツ系やアメリカ、イギリスの作品を演奏する際はB♭管を使用することが多い。また、ソプラノトランペットにはドイツ圏で使用されているロータリー方式のトランペットがある。これはヴァルブ機構ではなく、管の長さを変える機構としてフレンチホルンに使用されているロータリー方式をトランペットに採用している。ヴァルブ方式に比較して可動部分のストロークが短いのが特徴である。音色は管の口径がヴァルブ方式のトランペットより大きいので、柔らかいのが特徴である。ただし、ヴァルブ方式になれた演奏者にとっては演奏する際に少々違和感を感じる。これらの楽器を総称してトランペットと呼ぶが、練習者はまず、B♭管を選びその練習を始めるべきである。最初に練習者がしなければならないことは、各可動部分がスムーズに動くかをチェックする。ヴァルブ、第1・第3トリガー、チューニングスライド等の動きをチェックし、もし不具合が発生しているときは対策を講じる。その後楽器を演奏する事になるが、最初は実音Fをしっかりと演奏できたら、徐々に上下の音を演奏し、音域を広げていく。初心者にとって作音楽器であるトランペットは実音B♭以上の音域を演奏することは難しいことである。特に実音D以上は演奏者に負担にならないようにすることと、音色的に十分振動した音が出せるまでしっかりと練習することが必要である。これにより上達が早くなり練習者の負担が軽くなる。

金管アンサンブル

(1) 金管アンサンブルの種類

基本的に金管楽器はオーケストラ楽器であり、独奏楽器ではない。そのために金管楽器にとってアンサンブルの練習は個人練習に次いで重要な位置を占める。金管アンサンブルの歴史は古く、ヨーロッパでは1600年代にはその原型を見ることが出来る。その時代には主に時刻を知らせる Tower Music としてヨーロッパ中世の城塞都市において、高い塔から演奏していた。その時の基本的なスタイルは第1トランペット・第2トランペット・ホルン・トロンボーン・チューバの金管アンサンブルであった。もちろん当時においては、これらの楽器の原型が使用されていた。

この金管5重奏は管楽器のアンサンブルスタイルとしては最も完成度が高く、数多くの曲が作られている。また、トランペット・ホルン・トロンボーン・金管3重奏もフランスのプーランク等が優れた作品を残している。各金管楽器だけのアンサンブルも数多く作曲されている。トランペット2重奏ではストラヴィンスキーの劇場開幕のファンファーレが有名である。またトランペット10重奏等、多種に上る。その他の金管楽器についても同様であるが、ホルン・トロンボーン・チューバでは、各楽器ごとの4重奏が最もバランス的に安定している。

近年アンサンブルコンクールが盛んになり、大編成の吹奏楽だけでなく、アンサンブルにも教育者の目が向けられている。それにつれてアンサンブルのレパートリーも増加している。参加者が最も多いのは吹奏楽連盟が主催しているコンクールであるが、現在8名までのアンサンブルしか参加できない。可能ならば、コンクールの種目を3～8重奏まで細分化しきめの細かい実施を望んでいる。

金管アンサンブルの編成 (主として考えられる編成)	
3重奏	Tp + Hr + Tb Tp 2 + Tb
4重奏	Tp 2 + Hr + Tb Tp 2 + Tb 2 Cor 2 + A・Hr + Eu
5重奏	Tp 2 + Hr + Tb + Tub (金管アンサンブルで最も多い編成, 名曲多数) Tp 2 + Hr + Tb 2 Tp 2 + Tb 3
6重奏	Tp 2 + Hr + Tb + Eu + Tub Tp 2 + Hr + Tb 2 + Tub Tp 2 + Tb 3
8重奏	Tp 2 + Hr 2 + Tb 2 + Eu + Tub Tp 4 + Tb 3 + Tub Tp 4 + Tb 4

小学校における金管アンサンブル指導

小学校における金管アンサンブルのメリットは小編成であることにより各演奏者のコミュニケーションがはかりやすいことがある。単独の指揮者の代わりに演奏者のリーダーがインザッツ (einsatz) を出さねばならない。また各パートが独奏であるので、演奏についての責任感が生まれる。この事により各演奏者が自己パートの音楽について深く考え、積極的に参加することが出来る。

また、金管アンサンブルでは3人から10人程度の少人数で演奏するので、個人の音楽性、演奏技巧が反映される点にある。ただし個人にかかる責任も大きくなり、各人が安定した技量を持つ必要

がある。また、他の演奏者を聞くことにより、個々のイントネーションを調整し合わせることが容易である。主旋律を強調してバランスを取ることや各演奏者の音楽性を統一することなど協調性が養うことが出来る。緊密なアンサンブルと音楽性を練習することにより、教育現場では高い教育効果を得ることが出来る。

金管アンサンブルの指導では音の指向性が強いので、ベルの向きに注意し、バランスを考える。トランペットやトロンボーンは体の向きと同じ方向に音が出るが、ホルンは通常後ろ向きに出る。チューバは垂直方向である。これらを注意しながら、アンサンブルを整えなければならない。

金管アンサンブルは木管アンサンブルより小学校では比較的導入が容易である。理由として小学校では木管楽器より先に金管楽器が採り入れられることが多い。これは前述したようにトランペット鼓隊や金管バンドから導入し、その後木管楽器を採り入れて吹奏楽に発展することが多いからである。では、これらの金管楽器集団による合奏も広義の金管アンサンブルと呼ぶが、ここで言う金管アンサンブルとは何か。それは以下を基準と考える。各楽器の各パートが一人で演奏されること。単独の指揮者が存在しないこと。これらについては小編成のアンサンブルとして理解できるが、人数については全日本吹奏楽連盟が8人以内と定めている。各地区吹奏楽連盟主催のアンサンブルコンテストに出場する中学生以上の出演者には適当であるが、小学生にとってはなかなか大変である。レパートリーとして小学生が演奏できる金管アンサンブルが少ないのも問題である。質の高い音楽性と小学生の演奏技術を併せ持つ楽曲の増加を期待したい。現在出版されている金管アンサンブル曲は効果的な編曲や作曲が多いが、トランペットにおいては特に演奏における負担が大きいため、8重奏の場合はそのパートを二人で分担して演奏できるようにすると、演奏できるレパートリーも増えるし、無理のない指導が出来る。すなわち吹奏楽連盟等のコンクールでは小学生の場合は10人ほどのアンサンブルまで認めてもよいのではないかと思う。

終わりに

管楽器の指導法研究の重要性は言うまでもないが、これからのポイントは地域の特性を考える中で進めることが必要である。郷土芸能以外の音楽文化的に言えば一点集中型の鹿児島県の中で離島や僻地の管楽器教育をどのように進めるかがこれからの課題である。「ゆとり」と「生きる力」の教育を展開する中で、今後は如何に「無理のない」しかも「効果的な」特別活動における、バンド活動を展開していくかを小学校の先生方と共に考えたい。そして、金管楽器における総合的指導法の研究を今後も続けたい。

引用・参考文献・協力

- 1 佐藤正人の“音楽セミナー” http://sound.jp/kswe/contents/seminar/seminar_099.html
- 2 IPA「教育用画像素材集サイト」 <http://www2.edu.ipa.go.jp/gz/>
- 3 楽器の材質と音色 <http://www.nagae-co.jp/trumpet.html>
- 4 板倉駿夫著 うまくなろうトランペット 音楽之友社 1999年

- 5 織田準一著 オリババのトランペットが吹きたい 音楽之友社 2001年
- 6 菅原明朗著 楽器図説 文藝春秋社 1933年
- 7 城多又兵衛・千蔵八郎共著 音楽図説 1966年
- 8 木村邦彦著 人体解剖学 1980年
- 9 大澤健一著 学校教育における吹奏楽指導について 国立音楽大学研究紀要第30集 1995年
- 10 協力；鹿児島市立八幡小学校金管バンド（福留健之教諭指導）